

2016年7月19日

愛媛県知事 中村時広 様

790-0003 松山市三番町 5-2-3 ハヤビル 3F

伊方原発をとめる会

事務局長 草薙順一

〒896-0021 鹿児島県いちき串木野市住吉町 134

川内原発 30 キロ圏住民ネットワーク

代表 高木章次

申し入れ書

1. 申し入れ項目

- (1) 深刻な問題のある原子炉容器上蓋(うわぶた)の取替をしないまま再稼働を予定している四国電力の姿勢に対し、知事は再稼働同意の撤回を示して、「スケジュールありき」の態度を許さないこと。
- (2) 17日に発生した、伊方3号機の一次冷却水ポンプの水漏れは、重大な冷却材喪失にもつながるものであり、知事は全ての冷却水ポンプの徹底調査を求めること。
- (3) 原子力規制委員会・前委員長代理が、基準地震動の「過小評価」を指摘しており、四国電力の「過小評価」は以前から指摘されてきた。知事として原子力規制委員会に審査のやり直しを求めること。県の環境安全管理委員会原子力安全専門部会でも批判的見地をもつ委員を充足し検討を行うこと。

2. その理由

- ① 応力腐食割れを起こしやすいインコネル 600 製の原子炉容器上蓋は、全国の加圧水型原子炉のうち、伊方3号機と玄海3号機以外は、インコネル 690 製の改良型に交換または装備されており、交換のないまま現に再稼働に直面しているのは伊方3号機のみとなっている。上蓋は制御棒の挿入にも重大な影響を与えるものである。伊方3号機の改良型上蓋は製造完了しており4カ月で交換できるとされ、四国電力も2013年に交換すると発表していたにもかかわらず、交換されないまま再稼働させようとしているのは「スケジュールありき」の異常な姿勢である。知事及び愛媛県が「スケジュールありきではなく」と語ってきたことにも反するものである。伊方原発と同じウェスティング・ハウス製造の米国のデビスベッセ原発では、インコネル 600 の原子炉容器上蓋の損傷が激しく、制御棒が入らなくなる可能性もあった。強烈な地震動が繰り返し襲った際に割れが進行し破裂という重大事故の可能性も排除できない。(資料 1-1~1-4 参照)
- ② 一次冷却水ポンプのシールのトラブルは、重大な冷却材喪失につながるものが四国電力から規制委員会への報告書にも記されている(資料 2-2)。原子炉が高温・高圧となり、そこに強烈な地震動が襲った時の危険性ははなはだ大きい。軸と軸受けの隙間対策は、外側で押さえ込む機能が喪失すれば、壊れていなくてもシールから高温・高圧・高濃度に放射能を含んだ一次冷却水が漏れ始める。(資料 2-1、2-2、2-3 参照)
- ③ 原子力規制委員会の委員長代理で耐震安全性の審査の中心にいた島崎邦彦氏が熊本地震のデータと比較して、基準地震動の算出において「過小評価」があることを指摘している。これは大阪府立大学名誉教授の長沢啓行氏が基準地震動の「過小評価」を指摘してきたことの一部が証明されたとみるべきである。伊方原発について、多様な過小評価が指摘されてきており、熊本地震など最新の知見をもとに見直しを求めるべきである。(資料 3 島崎邦彦氏の書簡参照)